

## 大学時代のフェノロサ

### ——「普通の若者」による学びと思想受容の体験——

伊 藤 豊

#### 1. はじめに

E・F・フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908) は、明治期の日本美術復興運動への貢献によって歴史に名を残しており、またそれに関連する先行研究も豊富なのだが、一方で1878年の最初の来日に先立つ、彼の青年期を対象とした考察は数少ない。一般的な動向としては、フェノロサの活動を近代日本美術史などの個別の学問分野で評価しようとする試みが主であり、このことが来日以前の彼に関する研究を質量ともに希薄にしている、一つの理由であろう。さらに言えば、フェノロサが来日以前の己について直接に語った記録も、大してあるわけではない。したがってこの時期の彼の活動を探るには、散在する一次・二次資料を駆使する他はないのだが、そのような面倒な作業にあえて取り組もうとする奇特な者がそれほど存在するはずもなく、結果として若き日のフェノロサに関しては、未解明な部分が相当残されているという現状にある。

いささか乱暴に要約すれば、従来のフェノロサ研究は専門分野ごとのトピカルな分析に偏しており、その反面として、一個の人間としての彼の像が依然として瘦せたものに留まっている感じは否めない。つまり、先行研究ではフェノロサの事績とその歴史的意義は多様に論じられているものの、そうした事績を成すに至った人間フェノロサの内実が、なかなか見えてこない、ということである。本稿の目的は、若き日のフェノロサの人物ならびに思想的な営みを、特に彼の大学時代に焦点を当てつつ考察することによって、上記のような欠点を多少なりとも補うことにある。

#### 2. 内気な若者イメージの再検討

1870年秋、フェノロサは故郷のマサチューセッツ州セーラムを離れ、同州ケンブリッジにあるハーヴァード大学に入学する。L・チゾムはその先駆的フェノロサ伝において、大学時代のフェノロサを以下のように活写している。

Socially Fenollosa stood back from the swirl of college life....At Harvard he was reserved....He was one of a small minority of students to enter from public high schools, and he seems to have had little contact with those classmates whose ideas of success left scant room for philosophy, poetry, and music....Pictures show Fenollosa as a lean young man of rather somber look: straight black

hair curling over the ears, eyes set deep in a long, oval face. He is handsome, serious, sensitive, and seems somewhat withdrawn.<sup>1</sup>

若き日のフェノロサが「真面目で敏感」そして「やや引っ込み思案な」性格のゆえに、級友たちの多くと打ち解けるに至らなかったことは、おそらく事実であろう。その点については、大学時代の友人であった文学者N・H・ドールの以下の証言によっても裏付けられる。ただし一方でドールの証言は、チゾムによるものとはやや異なったフェノロサ像を提起しているようにも見受けられる。

Fenollosa was a pupil at the Hacker Grammar School in Salem, and fitted for Harvard at the High School in that city. In college he may have seemed somewhat reserved. Few knew him well. At first he roomed with Foote in College House, afterwards with his brother William (Harvard, 1875) in the West entry of Gray's. He sang in the College Glee Club and in the chorus of the Handel and Haydn Society. He was especially interested in philosophy, and was deeply influenced by the writings of Herbert Spencer. He was active in forming the Herbert Spencer Club, to which Dyer, Sara Clarke, and a few other devotees belonged....He was a member of the Pi Eta and the Christian Union. His high rank entitled him to membership in the Phi Beta Kappa Society.<sup>2</sup>

ドールは大学時代のフェノロサにとって、最も親しい友人の一人であったという。そのドールがフェノロサの「いくぶん内向的な」傾向を指摘し、またフェノロサを「よく知る者はほとんどいなかった」と言っているのだから、これは信頼できる情報とみなされようし、この点ではチゾムのフェノロサ像とも、確かに重なっている。

ただし友人関係をめぐるフェノロサの内気とも見える態度は、ハーヴァード大学において彼が公立高校出身の少数派に属したという事実とは、少なくともチゾムが論じているような形で関連付けられるべき話ではない。私学出身者は通常、富裕な家庭の子弟であり、一方で公立出身者は経済的に必ずしも恵まれない学生であるという今日的な通念に基づけば、出自や階級の差を原因とする障壁をフェノロサと周囲の同級生との間に見出すことは、極めて容易な推定であろう。しかしながら、公立のセーラム高校からハーヴァード大学へと進学したフェノロサの経歴は、同時代のハーヴァードの他の学生に比べて著しく異例であったとは、決して言えない。1867年から1874年にかけて、ハーヴァード大学での公立高校出身者は漸減していたものの、それでも全入学者の約30パーセントを依然として占めており、とりわけフェノロサの出身校であるセーラム高校は、当時のマサチューセッツ州における名門進学校の一つであった。<sup>3</sup>

### 3. 普通の若者としてのフェノロサ

さらに言えば、フェノロサの人付き合いの幅がそれほど広いものでなかったことはおそらく事実であるにせよ、別に彼の学生生活が孤独な引き籠り状態と化していたわけでは、決してない。幼い頃から音楽に親しんだフェノロサは、ドールの証言にもあるように、グリー・クラブの主要メンバーの一人であったし、ヘンデル・ヘイドン・ソサエティのコーラスにも参加している。またフェノロサが学生間の親睦団体であるパイ・エータ・ソサエティや、クリスチャン・ユニオンに加盟していたことは、別の資料でも確認できるし<sup>4</sup>、ドールは先の引用部で、ハーバート・スベンサー・クラブ設立をめぐるフェノロサの奔走を、40年近くが経過した後ですら明瞭に回顧している。大学時代のフェノロサは多少内気ではあったが、極端な厭世家などでは決してなく、それなりの社交性を有する普通の若者であったとするのが、私としては妥当な推定に思えるのだが、いかがであろうか。

とはいえ、幼き日のフェノロサが引っ込み思案な少年であったことは、妻メアリも指摘している。一方で大学時代の彼が成績優秀な学生であり、またそのような優秀さへの自覚が生来の性格と相俟って、彼と周囲の学友との間に微妙な壁を作ったというのは、それはそれとしてありうることであろう。特に学生時代のフェノロサの秀才ぶりについては、メアリが以下の証言で雄弁に伝えている。

He was, by nature, a shrinking and sensitive child, easily rebuffed, and imagining slights where none were intended....He attended the Hacker Grammar School in Salem, and was fitted at the High School of that city for Harvard, entering the school in the year 1866, with the rank of number one in the preliminary examinations. At college, he soon became known as a student of unusual qualities....He graduated first in a class of one hundred fifty men, with a senior year average of ninety-nine per cent., and received "Higher Honours in Philosophy."<sup>5</sup>

メアリがこう誇らしげに述べたのは、夫フェノロサの遺著の前文においてであるが、ただし一方で、ハーヴァード大学文書館に残る記録を精査すれば、メアリの叙述は亡き夫の天才を強調するあまり、明らかな偏向を示していると言わざるをえない。1年次終了の時点で、フェノロサの総合成績は174人中20位であり、物理学の単位を落としそうになって、学業不良警告を受けたりもしている。2年次には多少順位が下がり46位となるが、3年次には挽回し、11位まで上る。4年次成績平均のみを見れば、確かにメアリの言うように学年1位ではあったが、この年にフェノロサが登録した科目は、哲学と弁論術の2つだけであった。なるほど、これら2科目でフェノロサが取めた成績がほとんど満点であったことは、彼の「尋常ならざる才能」を示す一つの証左であるが、学業全般において彼が群を抜いた才能を示していたかと問えば、答えは否である。大学

卒業時、フェノロサの最終総合成績は140人中15位であり、そうした事実から確実に言えるのは、彼がクラスの上位に位置する秀才の一人であったということのみであろう。<sup>6</sup>

学校での成績は概してよく、そこそこに社交的な面も有しながら、多少内向的な性格のゆえか、級友の間で特に目立つ存在でもなかったというのが、私の描くこの時期のフェノロサ像である。要するに、彼は特に珍しくもない普通の若者であったのだが、そうした普通ぶりを示す一つの逸話を、以下に紹介しておく。2年次のフェノロサは、祈祷の時間を10回欠席したせいで、個人的に呼び出され注意を受けている。これで懲りることがなかったのか、彼はその後も22回の欠席をかさね、今度は公開の場で注意を受けるに至る。また彼は、2年次から3年次にかけて演習のクラスをサボりまくったという理由で、2回ほど呼び出し注意を食らっている。<sup>7</sup>こうした逸話をフェノロサが有した「尋常ならざる才能」なるものと合わせれば、見えてくるのは以下の単純な事実である——大学時代のフェノロサは哲学を始めとする自分の好きな事にこそ没頭し、優れた能力を示した一方で、やりたくない事は面倒くさいからやらないという、まあどこにでもいる一般的な若者であった。

#### 4. 言葉の力の養成、そして哲学への志向

フェノロサは生涯を通じて詩作を愛好したが、青年期からそうした傾向は顕著であった。<sup>8</sup>この分野でのフェノロサの才能が同窓生の耳目を初めて集めたのは、卒業祝賀会で朗読した詩によってである。

I ONLY sing the song we all are singing,  
For each man is a poet here to-day,  
And each a wreath of memories is bringing  
Upon the tomb of four dead years to lay.

And as I strike my lyre to wake the feeling  
Which is, perhaps, unconsciously your own,  
I hear through all its joyous measures stealing  
The sad key-note in restless monotone.<sup>9</sup>

4年間の学生生活の思い出を織り込んだ、活字にして14頁に及ぶ長大な詩は、上のように始まる。「今日ここにある皆が詩人なのだ」という言葉に明らかなように、フェノロサは同窓の仲間たちの代弁者として、彼らが無意識に共有する感情を吟じようとしている。この詩に対する反響について、ドールは以下のように回顧している。

He contributed to the college periodicals, but probably few in the class knew how prolific his Muse was, so that the brilliancy of his Class Poem...was a surprise both in its witty and in its more serious lines. Few class poems since or before have excelled the standard that it established.<sup>10</sup>

フェノロサにとっての詩作とは、自身の言葉の力を最大限に増幅し、それによって聴衆や読者に訴えかける試みであったように思われる。実際、詩作は言論人としてのフェノロサの後の人生において、時に大きな意義を有していた。東西文明の融合を主題とした一大叙事詩とも呼ぶべき作品である「東と西」(“East and West”)に顕著なように、彼の詩作は単なる個人的な趣味以上のものであり、己の理想や信念を世に問うための、一種の言論媒体として構想されていたのである。<sup>11</sup>

さらに言えば、言葉の力の育成という点で、大学でフェノロサが学んだ知識や技能の中で特筆すべきは、演説ならびに雄弁の法であった。彼は2年次に演説で学内賞を獲得し、また3年および4年次で受講した弁論術 (forensics) の授業では、両方ともほとんど満点を収めている。<sup>12</sup>こうした経験を経てフェノロサが身につけていった雄弁さは、言論人として彼が活動していくにあたって、必須の基盤を構成するものであった。後年、フェノロサが自身の思想を人々に伝えるために用いた主要な手段は、著述ではなくむしろ講演であり、また現存するフェノロサ文書の多くが講演草稿であるという事実にも明示されているように、彼の言葉は詩篇を朗読するのと同じく、聴衆に対して語られることを前提として編まれていた。

実際、著述のみによらず聴衆に直接語りかけることを選び取ったからこそ、フェノロサは自身の思想をより持続的に影響力ある何物かに転化しえたとも言える。例えば、イェール大学美術学校でフェノロサが講演をおこなった20年後に、当時の聴衆の一人は、彼の語りぶりを以下のように回顧している。

Some exaggeration was inevitable in the new-born enthusiasm of a man of his temperament...yet if he spoke too strongly he never spoke absurdly.<sup>13</sup>

己の著述によって同時代の多数の読者を魅了するという点においては、必ずしも成功したようには見えないフェノロサが、アメリカの後世に多少なりとも名を残しえたのはなぜか。それは彼自身が直接口頭で聴衆に向けて語った言葉の力のゆえではなかったか。もしフェノロサが著述のみによって自身の思想を大衆に広めようとしていたなら、彼の熱情がこのような形で後々の人々の記憶に留まることは、おそらくなかったのではあるまいか。

ともあれ、大学時代のフェノロサが力を注いだのは雄弁さの研鑽のみではなく、それと並んで熱心に取り組んだのは、哲学の知識の修得であった。自身の生きる世界やそこで直面する問題を、一定の哲学的枠組みに則して理解していこうという、フェノロサが終生維持した知的態度の基底

部分は、この時期に形成されたと言っても過言ではない。チゾムはこの点をめぐって、学生時代のフェノロサの教養や思想の構造について以下の指摘をしている。

Harvard had opened the way into a world of ideas where he felt very much at home. He had been powerfully attracted to universal philosophies: Emersonian pantheism, Spencerian mechanism, Hegelian metaphysics. Teachers [at Harvard]...had confirmed and widened his own freethinking and cosmopolitan ideals of individualism.<sup>14</sup>

ただし、チゾムの指摘した「エマーソンの汎神論」、「スペンサー的機械論」、そして「ヘーゲルの形而上学」の三要素のうち、「ヘーゲルの形而上学」については、少なくとも学部生の段階でのフェノロサを考える際には、多少割り引くべきかと思う。宗教と哲学の関係を究明すべく、後に大学院へと進学したフェノロサが、ヘーゲルに関心を示したことは確かに事実とせよ、それは授業や翻訳や二次文献を通じての間接的な知見にすぎず、ヘーゲル文献の詳細な読解やその深い影響に基づいてフェノロサが自身の思想を練っていたとは、到底言えないと思うからである。<sup>15</sup>

ここで本論文の主張を先取りして言えば、大学時代のフェノロサの思想の根幹を形成するものは、一つはエマーソンであり、またスペンサーであり、さらにはそれらを包括・統合する枠組みとしてのユニテリアンの世界観であった。大学生活を終えるに際して、フェノロサは「汎神論」(“Pantheism”)と題する論文を物している。「汎神論」において彼が試みたのは、大学時代に自身が身に着けた教養のすべてを、一つの体系的な世界理解という形で提示することであった。若き日のフェノロサはいかなる哲学的知識を有し、またそうした知識に基づき何を創り出そうとしていたのか——以下で彼の「汎神論」を読み解くことによって、この問いに可能な限り答えてみたい。

## 5. エマーソンの受容

まずフェノロサの「汎神論」から、主題である汎神論の定義に関する二つの節を、以下に引用する。

Pantheism is a power in religion, in practical life, in literature, and in art. That one beneficent soul throbs through all varieties of creatures, that nature with her many members is a living organism, that there is no corner of the Universe so cold and strange as to provoke a shudder are thoughts which are cherished, although perhaps unawares by every large-hearted man.

Some men denounce the things of the earth as casual; others...pass by the common thing of life as mean and vulgar. The Pantheist alone recognizes no vulgarity in the world....In revering the



smallest part, we revere the whole which works through the parts. Pantheism is a religion of Nature which good and cultured men can carry into their daily lives, it is the only remedy for the prevailing American irreverence and false worldliness, and it yields the indispensable basis of an Ethical system, an unquestionable command which is the law of God.<sup>16</sup>

最初の引用部は「汎神論」の冒頭にあたり、ここでは万物に満ちる神の意思や、そうした意思によって自然が「一つの生命ある有機体」として存在しているという、ある意味で一般的な、したがって取り立ててエマーソンのと言うほどでもない、汎神論の理解が綴られている。一方で後者の引用においては、自然の細部にまで貫徹する全的なものの調和が称揚されているのみならず、そうした調和的な自然が人間にとっての一種の倫理的な規範となるべきことが、唱えられている。自然が象徴するこのような有機的統一を理解しない人々は、「この世の物事を皮相なものであると非難し」、あるいは「生をめぐるありふれた事象を、取るに足らず陳腐なものとして無視する」といった、致命的な誤謬を犯している。自然に関する汎神論者の見方は、こうした態度とは完全に異なるものである。汎神論的な信念によれば、人は自然を日常的に経験することによってこそ、この世に遍在する神の意思を知ることができる。現世の「細部を畏敬する際に、我々はそうした細部を通じて機能する全体をも畏敬する」のであり、ゆえに「汎神論者の認識では……現世においていかなる陳腐さも存在しない」のであった。

倫理的な行動原理としてのフェノロサの「汎神論」に対するエマーソンの影響は、特に両者の自然観を比較することで明瞭となろう。以下はエマーソンの『自然』(Nature)からの引用である。

The world proceeds from the same spirit as the body of man. It is a remoter and inferior incarnation of God, a projection of God in the unconscious. But it differs from the body in one important respect. It is not, like that, now subjected to the human will. Its serene order is inviolable by us. It is, therefore, to us, the present expositor of the divine mind. It is a fixed point whereby we may measure our departure. As we degenerate, the contrast between us and our house is more evident. We are as much strangers in nature, as we are aliens from God.<sup>17</sup>

エマーソンによれば、自然とはまさに神の創造した完全無欠の秩序であり、人間の意思の彼方にある、したがって人間が犯すことなど到底能わぬ実体である。したがってエマーソンは世界なるものを「我々との距離を測るための基準点」とであると捉える。「我々が墮落するにつれて、我々と我々の住処との対照はより明瞭となる。我々は神から疎外されていると同じ程度に、自然においても余所者なのだ」。かくして、人々が自身と自然との乖離（つまり、神からの疎外）を自覚することは、現世を理想へと近づけようとする試みの、まさに第一歩として機能することになる。神によって創造された自然は、人が回帰すべき原点、あるいは理想郷として提示されることで、

社会改革の原動力へと転化するのであった。

上述したエマーソンの自然観を、フェノロサはその「汎神論」において、忠実に継承しているように見える。フェノロサの定義によれば、汎神論とは「自然を崇める宗教であり、敬虔で教養ある人々が、己の日常と化すことのできるもの」である。このような汎神論的信条を、自身の生活へと意識的に組み込んでいくことにより、人は「倫理体系の不可欠な基盤、つまり神の法であるところの、疑いえぬ指令」を初めて知ることができるのであった。汎神論の見解において、神を信じ畏敬するとは、もはや純粹に個人的な次元での問題ではありえない。汎神論者にとって、自然をめぐる思索はなるほど重要である一方で、もし人がそのような思索をおこなうのみに留まり、その先に来るべき社会改革へと思いを致さなければ、それは単なる抽象的思考に終わらざるをえない。当為としての自然を俗世と対置し、後者を前者に近づけるための具体的社会改革へと人を駆り立てる原理こそ、エマーソンの自然観を継承しつつフェノロサが構想した汎神論であり、従ってそれは、「アメリカに拡がる不敬虔な態度ならびに誤った現世理解に対する、唯一の救済策」なのであった。

上に要約したような汎神論的世界観に基づきつつ、フェノロサは「汎神論」における自身の思索の対象を、「物質」へと定める。物質とは人間の経験世界を構成する最も基本的な単位であり、だからこそ、「活気ある有機体」としての自然を哲学的に探求していくための、まさに出発点たるべきものであった。「汎神論」は物質について、以下のような議論を展開する。

We are not quite able to scorn matter. When the warm sunshine makes the dew-drops in the meadow sparkle, and a fresh breeze comes up from the river, and the air sings with the glad goodmorning of the birds, we feel a community and concord with things around us, which no bad metaphysical dream can dispel. The mysterious forces which Science reveals to us become no longer awful when we know that they are correlated with love. The inevitable chain of causes and effects is contained now and ever in the First Cause. God's mind and love are the Universe...We love matter because we cannot banish mind from it.<sup>18</sup>

「我々が物質を愛するのは、自身の心からそれを払拭しえないからである」と述べるフェノロサの問題意識が何に由来しているのかと問えば、そのソースの一つはやはりエマーソンであると答えねばなるまい。エマーソンは『自然』において、物質について以下のように論じている。

Three problems are put by nature to the mind; What is matter? Whence is it? and Whereto? The first of these questions only, the ideal theory answers. Idealism saith: matter is a phenomenon, not a substance. Idealism acquaints us with the total disparity between the evidence of our own being, and the evidence of the world's being. The one is perfect; the other, incapable of any assurance; the



mind is a part of the nature of things; the world is a divine dream, from which we may presently awake to the glories and certainties of day. Idealism is a hypothesis to account for nature by other principles than those of carpentry and chemistry. Yet, if it only deny the existence of matter, it does not satisfy the demands of the spirit. It leaves God out of me. It leaves me in the splendid labyrinth of my perceptions, to wander without end. Then the heart resists it, because it balks the affections in denying substantive being to men and women.<sup>19</sup>

唯心論が物質の存在を否定しても、それは魂の満足をもたらすものではないとのエマーソンの主張は、「汎神論」からの上記の引用部でフェノロサが展開したところの、「形而上学的な悪夢」への反駁としての物質の称揚というプロットの元ネタであったと私には見えるのだが、いかがであろうか。

## 6. スпенサーの受容

「汎神論」をさらに読み解いていけば、フェノロサの物質への着目、そして「因果の必然の連鎖」に基づく機械論的世界観には、彼が大学時代に熱中したとされるスペンサーからの影響を見ることが出来る。例えば物質について、スペンサーは『第一原理』(First Principles) でこのように述べている。

Our inability to conceive Matter becoming non-existent, is immediately consequent on the very nature of thought. Thought consists in the establishment of relations. There can be no relation established, and therefore no thought framed, when one of the related terms is absent from consciousness. Hence it is impossible to think of something becoming nothing, for the same reason that it is impossible to think of nothing becoming something – the reason, namely, that nothing cannot become an object of consciousness. The annihilation of Matter is unthinkable for the same reason that the creation of Matter is unthinkable; and its indestructibility thus becomes an a priori cognition of the highest order – not one that results from a long continued registry of experiences gradually organized into an irreversible mode of thought; but one that is given in the form of all experiences whatever.<sup>20</sup>

スペンサーによれば、思考が諸物の関係性において成立している以上、存在が無に転じることは(あるいはその逆も)思考によっては想定できず、したがって物質の消滅や創造といったことも、人間の思考では取り扱いえない。こうして物質の「不滅性」とは、思考では捉えられない性質の「最高位の先験的認識」とされるわけである。

スペンサーのこうした立場は不可知論の一種として通常は捉えられるが、大学でハーバート・

スペンサー・クラブを結成しようと試みるほどスペンサーに入れあげたとされるフェノロサが、スペンサーによるこの種の議論を哲学あるいは世界認識の理論として精緻な形で受容していたかと問えば、「汎神論」を読む限りでは、私にはどうも疑問が残る。一方で、『第一原理』におけるスペンサーの主題が宗教と科学の調和にあったことに鑑みれば、<sup>21</sup>「科学が我々に明かす神秘の諸力」が「愛によって相互に関連している」と、先の引用部で述べるフェノロサに、スペンサーの議論の影響が散見されると言っても、おそらく過言ではあるまい。

スペンサーの受容という点で大学時代のフェノロサの思想をさらに見ていけば、それは「汎神論」における以下の一節に顕著である。

While your practical men are wondering whether Darwinism is true, he is carrying into active life theories of which they have never dreamed. Is the abolition of Slavery founded on a mere speculative dream of the universal brotherhood of man? Is not the Society for the Prevention of Cruelty to Dumb Animals the practical result of something more than a vague uneasiness at seeing anything suffer? All social processes are of unification...The parts of society, while becoming more and more differentiated, become more and more dependent upon one another, more and more united into an organism. Who will deny that unconscious Pantheistic principles are at the bottom of all progressive movement, and that the conscious Pantheist of today with brain and muscle is bidding the movement God speed.<sup>22</sup>

上の引用部でフェノロサが「ダーウィニズム」と呼ぶものは、文脈からすれば生物学的というよりは、むしろ社会進化論としてのダーウィニズム、つまりスペンサーの思想そのものであった。スペンサーによれば、因果の絶え間ない連鎖としての進化という過程の背後には、そうした過程を生起し、稼働させ続けてきた究極の原動力が存在しなければならない。これがスペンサーの言う「力の永続性」(Persistence of Force)である。

...the phenomena of Evolution have to be deduced from the Persistence of Force....Already the truths that there is equivalence among transformed forces, that motion follows the line of least resistance or greatest traction and that it is universally rhythmic, we have found to be severally deducible from the persistence of force; and this affiliation of them on the persistence of force has reduced them to a coherent whole. Here we have similarly to affiliate the universal traits of Evolution, by showing that, given the persistence of force, the re-distribution of Matter and Motion necessarily proceeds in such ways as to produce these traits. By doing this we shall unite them as correlative manifestations of one law, at the same time that we unite this law with the foregoing simpler laws.<sup>23</sup>

両者をこのように並列してみれば、「汎神論」からの先の引用部でフェノロサが言う「進歩の動き」は進化に、そして「無意識の汎神論的諸原理」は力の永続性に対応していることが看取できよう。つまりフェノロサにとっての「神の推進する……運動」とは、スペンサー的な社会進化論の、いわば変奏曲にすぎないことが明らかである。

## 7. 正統と異端の間で

フェノロサ、エマーソン、そしてスペンサーの三者を上記のように比較検討すれば、「汎神論」とは結局のところ、エマーソンとスペンサーの代表作をそれほど換骨奪胎もせずに折衷した産物にすぎないのでは、という疑念も出てくる。ただしその一方で、「汎神論」は両者に由来する諸要素を無原則に混交したものでは決してなく、フェノロサなりに一貫した理論的な枠組みの内部で、一つの思想としての総合を達成すべく書かれたものであった。以下、この点について若干の私見を述べておきたい。

若き日のフェノロサの描き出す「自然」とは、19世紀アメリカにおけるユニテリアン哲学の中核を構成するところの、いわゆる自然神学 (natural theology) 的な世界観の焼直しであった。ユニテリアン的理解によれば、自然における様々な事象とは、神が創造し司る普遍的法則の反映である。人が自然を観察する際、そこに原因→結果という一定の法則性を発見するのは、自然が神意に基づき展開する因果の大なる連鎖として成立しているからである。自然におけるすべての事象は、それに先立つ別の事象の結果であり、こうした因果の繋がりをより根本的な原因に向かって遡っていけば、最終的に姿を現すのは、すべての存在を生起するに至った初発的原因であるところの、「第一原因／存在の根源」(the First Cause) でなければならない。無論、第一原因であれ存在の根源であれ、それは創造主つまり神のことであり、我々が自然界に一定の法則性や因果律を見出しうるという事実から帰納すれば、そうした秩序を創り出したグランド・デザイナーである神の存在を認めることこそ、論理的そして哲学的に正しい結論であるというのが、自然神学に基づくユニテリアン哲学の立場であった。

フェノロサの在学当時におけるハーヴァード大学はユニテリアンの一大拠点であり、上述した類の宗教的信念を哲学的に根拠づけようと努力する知識人たちの、言わば巢窟であった。熱心な哲学の学徒であったフェノロサが、授業その他の機会を通じて、哲学と混交した形で自然神学の知識を積極的に身につけていったであろうことは、想像に難くない。加えて特筆すべきは、この時期のフェノロサのごく近い周囲に、ハーヴァードにおけるユニテリアン知識人の中心人物の一人であるF・ボーウェン (Francis Bowen, 1811-1890) がいたことである。「ユニテリアン神学の哲学的根拠づけに関する、明敏かつ有能な擁護者」として同時代人に知られていたボーウェンは、学部時代のフェノロサに弁論術を講じ、そして大学院での専攻である哲学の教授でもあった。<sup>24</sup>

ただしユニテリアン的な世界理解から見れば、フェノロサの依拠するエマーソンにしるスペン

サーにしる、それらの大衆的な人気にもかかわらず、ともに異端の思想であったことは、注意されるべき事実であろう。まずエマーソンについて言えば、神との直観的な交感を中核とする彼の超越主義（Transcendentalism）は、しばしばユニテリアン知識人たちからの激しい攻撃を受けた。先に論じたように、現世の諸事象から帰納的に導かれる因果律が神の意思の反映であるという自然神学的な世界観にこそ、ユニテリアン哲学は立脚していた。ゆえにエマーソンの超越主義は直観を優先し論理を排するという点で、ユニテリアン哲学へのあからさまな挑戦であると理解されたのである。またスペンサーの思想の一大特徴とされる不可知論も、ユニテリアンにとっては非難の対象であった。スペンサーの言う「力の永続性」なるものは、実質的には神や創造主の同義語であるが、ただしスペンサーはそれらを人間の思考では捉ええない領域にあるものと位置づけたために、因果律的な世界認識を奉ずるユニテリアンたちの総スカンを食うことになった。<sup>25</sup>

一方で、ハーヴァードの知識人コミュニティ外部での、よりポピュラーな思想状況での話をすれば、エマーソンにせよスペンサーにせよ反キリスト教的な思想と一般に捉えられていたわけではなく、むしろ既存のキリスト教信仰の世俗的なヴァリエーションとして、同時代人の間で広く受容されたように思われる。特にスペンサーについては、いわゆる社会ダーウィニストとして後世にその名が定着したことにより、今日ではその実像が多少判りにくくなっているが、本人としては不可知論により神の存在の否定を目指すつもりなどさらさらなかったことは、以下に挙げる彼の二つの発言を見れば明らかであろう。

To say that we cannot know the Absolute, is, by implication, to affirm that there is an Absolute. In the very denial of our power to learn what the Absolute is, there lies hidden the assumption that it is; and the making of this assumption proves that the Absolute has been present to the mind, not as a nothing but as a something.<sup>26</sup>

It is above all things needful that the people should be impressed with the truth that the philosophy [i.e., the evolution doctrine] offered to them does not necessitate a divorce from their inherited conceptions concerning religion and morality, but merely a purification, an exaltation of them.<sup>27</sup>

スペンサーの唱道する社会進化論が19世紀後半期のアングロ・アメリカ世界で最有力の思想潮流となるに至ったのは、「力の永続性」を強力に肯定する彼の議論が、世界における神の遍在を理論的な形で支持こそすれ、否定することが決してなかったからである。社会とは「力の永続性」に基づく一つの有機体と捉えるスペンサーの哲学は、本人も認めるように、「宗教や道徳をめぐる従来の諸概念との決別ではなく、そうした概念の純化と発揚につながる」べきものであった。

スペンサーは既存のキリスト教的な世界観を破壊する存在ではなく、むしろ彼の哲学から進化に代表される科学的な要素が補完物として導入されることで、そうした世界観の安定は達成され

促進されるであろう——このような一般理解こそが、スペンサーの広範な人気を根底で支えていたのではないだろうか。<sup>28</sup>英米圏におけるスペンサー熱が最高潮に達したのは、1870年代であるとされる。大学在学中のフェノロサもまた同時代に生きる哲学志向の若者として、流行の盛りにあるスペンサー哲学のエッセンスを彼なりに掴もうとしていたに違いない。スペンサーに関する上記のような一般理解は、フェノロサの「汎神論」にも当て嵌るように思われる。

## 8. おわりに

ともあれ、自身の生きるハーヴァード大学の知識人主流によって異端視されたエマーソンやスペンサーの思想すら、フェノロサが積極的に受け入れたという事実自体、彼の知識欲が教室で学ぶ正統的学問の範囲を超えようとしていたことを示すものであるとは、確かに言えるであろう。正統と異端が混在した形での様々な思想的要素のせめぎ合いと、そうした諸要素を総合しようとする意志は、この後に続く大学院時代のフェノロサにも見られる特徴であり、彼の思想的営為を考察するうえでの有効なプロットとなりうるものであると、私としては考えている。

一個の人物の探究という点で言えば、来日以前のフェノロサをその思想に即しつつ描き出すという企図は、もちろん彼の大学時代のみならず、その後の大学院時代に関しても試みられるべきものである。ヘーゲル哲学に魅せられたフェノロサは大学院へと進み、しかしながら結局は哲学研究からも離れてリベラルなキリスト教神学の周辺を彷徨するうちに、とうとう美術へと辿り着く——私が描き出そうとする「普通の若者」としてのフェノロサ像は、おおよそ以上のようなものであるが、これについては別稿を準備中であり、今後の課題としたい。

## 註

- 1 Lawrence W. Chisolm, *Fenollosa: The Far East and American Culture* (New Haven and London: Yale University Press, 1963): 21.
- 2 Nathan Haskell Dole, "Ernest Francisco Fenollosa," *Ninth Report of the Class Secretary of the Class of 1874 of Harvard College, June, 1874-June, 1909* (Cambridge: Riverside Press, 1909): 40.
- 3 Nathaniel Dana & Carlile Hodges, "The University: Its Growth and Changes during the Last Twenty-Five Years. 1874-1899," *Seventh Report of the Class Secretary of the Class of 1874 of Harvard College, June, 1874-June, 1899* (Boston: Geo. H. Ellis, 1899): 151. だからこそドールは先の引用部で、"Fenollosa was...fitted for Harvard at the High School in that city" と、述べているわけである。実際、フェノロサと同じくセーラム高校出の学生を、彼の周囲に見出すことは容易である。ドールの説明に登場している、フェノロサの弟であるウィリアムも、セーラム高校からハーヴァード大学に進学しているし、またフェノロの一年次のルームメイトであった作曲家 A・フット (Arthur William Foote, 1853-1937) も、同じくセーラム高校の出身であった。
- 4 *Seventh Report*, 187, 189, 190.

- 5 Mary Fenollosa, "Preface," Ernest Francisco Fenollosa, *Epochs of Chinese and Japanese Art: An Outline History of East Asiatic Design*, vol. 1 (1912; reprint, New York: Dover Publications, Inc., 1963): xiv.
- 6 *Yearly Returns-Examinations & Aggregates, 1870-71; Yearly Returns-Examinations & Aggregates, 1871-72; Yearly Returns-Examinations & Aggregates, 1872-73; Yearly Returns-Examinations & Aggregates, 1873-74*. Harvard University Archives.
- 7 *Faculty Records. 1867-1872*. Harvard University Archives: 266; *Faculty Records. 1872-1874*. Harvard University Archives: 59, 72, 79, 227.
- 8 村形明子編『ハーヴァード大学ホートン・ライブラリー蔵 アーネスト・F・フェノロサ資料 第3巻』（ミュージアム出版、1987年）には、若き日のフェノロサが物した数篇の詩が収録されている。
- 9 *Baccalaureate Sermon, and Oration and Poem. Class of 1874*. (Cambridge: Press of John Wilson & Son, 1874): 33.
- 10 Dole, 40.
- 11 この点については、*Fenollosa, East and West: The Discovery of America and Other Poems* (New York: Thomas Y. Crowell & Co., 1893) を参照のこと。
- 12 フェノロサは1872年6月21日に、Boylston Prizes for Elocutions の一等賞を授与されている (Harvard College, *Class of 1874 Secretary's Report. No. 1. 1874* [n.p., n.d.]: 10)。また彼の弁論術の成績については、註7の典拠を参照のこと。
- 13 Frederick Wells Williams' review of *Epochs*, *Yale Review* 3 (October 1913): 198.
- 14 Chisolm, 28.
- 15 この点については、現在執筆中の別の論文にて詳しく論じる予定である。
- 16 Fenollosa, "Pantheism" (1874), 『フェノロサ資料 第3巻』, 87, 89.
- 17 Ralph Waldo Emerson, *Nature* (Boston: James Munroe and Company, 1836): 80-81.
- 18 Fenollosa, "Pantheism," 87.
- 19 Emerson, *Nature*, 77-78.
- 20 Herbert Spencer, *First Principles* (1862; 2nd ed., London: Williams and Norgate, 1867): 175-176.
- 21 Spencer, *First Principles*, ch. 1.
- 22 Fenollosa, "Pantheism," 88.
- 23 Spencer, *First Principles*, 398-399.
- 24 Bruce Kuklick, *The Rise of American Philosophy, Cambridge, Massachusetts, 1860-1930* (New Haven & London: Yale University Press, 1977): 28. 当時のハーヴァード知識人コミュニティにおけるユニテリアン哲学の影響力について、筆者の理解はクークリックが本書で展開した議論に多くを負っている。



- 25 ユニテリアン知識人によるエマーソン批判の典型的なものとしては, Francis Bowen, "Transcendentalism," *The Christian Examiner and General Review* 21 (January 1837) がある。またボーウェンはその主著において、「不可知論の哲学」としての実証主義の系譜にスペンサーを分類し、批判の対象としている。詳しくは Francis Bowen, *Modern Philosophy, From Descartes to Schopenhauer and Hartmann* (New York: Scribner, Armstrong, & Co., 1877): ch. 15を参照のこと。
- 26 Spencer, *First Principles*, 88.
- 27 Spencer to John Fiske, 24 November 1882, John Spencer Clark, *The Life and Letters of John Fiske*, vol. 2 (Boston and New York: Houghton Mifflin Company, 1917): 264.
- 28 この点に関連して示唆に富む議論を展開しているのは, Robert C. Bannister, *Social Darwinism: Science and Myth in Anglo-American Social Thought* (1979) である。

## **The Education of Ernest Francisco Fenollosa: Learning and Development in His Collegiate Life**

Yutaka ITO

The name of Ernest Francisco FENOLLOSA (1853-1908) is recorded in the history of modern Japan mainly for his contributions to the revival movement of Japanese native art. His activities as an art policy advisor for the Meiji government have often been analyzed in prior studies. Meanwhile, scholars have paid little attention to young Fenollosa before 1878 when he first arrived in Japan.

Because of this disproportionate analytical focus on Fenollosa's life, it has been forgotten or simply ignored that the higher education which he gained at Harvard profoundly influenced the course of his intellectual development. At college, Fenollosa adopted a particular attitude in absorbing and accumulating the learning of his time: With an ardent thirst for synthesis, he constantly endeavored to integrate various philosophical trends into a systematic whole of knowledge.

The purpose of this paper is to examine Fenollosa's collegiate life and learning experience with an extensive use of previously unheeded, archival and other first and second-hand material on the subject.